



TITLE:

雑纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雑纂. 日本外科宝函 1934, 11(6): 1466-1478

ISSUE DATE:

1934-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/203514>

RIGHT:

雜 纂

『鳥 潟 外 科 學 總 論』 成 ル

待チニ待ツテ居ツタ鳥潟教授ノ外科學總論ガ本年九月十日發刊サレタ。卷頭第1頁ニハ『謹ミテ本書ヲ 猪子・伊藤兩恩師ニ 獻呈ス 著者 鞠躬』ト掲ゲテアル。其次ノ頁カラ自序ガ始ツテキル。茲ニハ此ノ序文ト内容總目次トヲ紹介シテ本書ノ一般ヲ示スコト・スル。

自 序

此ノ著述ハ『停年ガ間近カニ迫リ來ツタ』コトヲ自覺シテキル大學教授ノ、斯界ニ向ツテノ、特ニ其ノ恩師ニ對シテノ——敢テ最終トハ言ハナイガ、先ヅソレニ近イ——綜括的學術報告書ノツモリデアル。ソレデアルカラ職責上是非トモ成シ遂グベキモノノ一ツトシテ爲サレタモノデアル。

伊藤(隼三)先生ノ外科學總論ヲ聽講シタ人ハ直チニ氣附クデアロウ、此ノ著書ハソレト同一系統デ、炎症篇ナドハ殆ンド全ク同一デアルコトヲ。マタ猪子(止戈之助)先生ノ臨牀講義ヲ悟入シタ人ハ明白ニ認メルデアロウ、此ノ書ニ述ベテアル診察ノ作法ヤ診斷ニ到達スルマデノ思索ノ動キ方ハ全然猪子先生ノ型デアルコトヲ。全ク其ノ通りデアル。本書ノ基礎ハ實ニ兩先生ノ講義ニヨリテ築カレタモノデアル。

兩恩師ノ衣鉢ヲ繼承シ、授ケラレタル基礎ニ據リテ大學教授トシテ今日マデ何ヲシテ來タカノ申譯ハ、本書ガ殆ンド全部漏無ク物語ルデアロウ。本書ヲ目シテ『斯界ヤ恩師ニ對スル停年教授ノ報告書デアル』ト謂フノハ此處ノコトデアル。

外科學(醫學)ニ向ツテノ余ノ教室ニ於ケル研究結果ハ其ノ都度發表サレテハキルガ、シカシソレガ外科學全體ニ對シテ果シテ何程ノ意義ヲ有スルモノデアルカラ、自他共ニ確實ニ、シカモ正當ニ認識スル爲ニハ、是非トモ『現代ノ外科學總論』ヲ眼ノ前ヘ持チ出シテ、個々ノ研究結果ヤ學術的主張ヲバ、ソレゾレノ定ツタ場所ヘ据エ附ケテ、第三者ノ立場カラ傍觀モシ、瞰下モンテ見ネバナラス。本書ノ主ナル使命ハ此ノ點ニ在ル。此ノ著ハ教室ノ研究主張ニ對スル(日本ダケデハナイ)一般學界ノ認識ヲ確保スル爲デアル。否、敢テ教室ノミトハ言ハナイ。ツマリ廣ク學術的眞理ヲ顯彰シ擁護スル爲デコソアル。

伊藤(隼三)先生ハ曾テ或ル一冊ノ古イ獨逸醫書ヲ、當時外科圖書室ノ一隅ニ陣取ツテキタ余ノ机ノ側ヘ持チ出シテ來ラレテ、痔核ヤ下腿靜脈瘤ヤ其他一切ノ靜脈瘤ヲ一括シテ記述シテアル場所ヲ余ノ面前デ所々朗讀サレテ、『書物モ此ノ様ニ著述スルトヨイデスナー』ト言ハレタ

(明治三十九年夏)。勿論コレハ『相似症ヲ縦斷的ニ統一シテ外科學總論ヲ書イテ見ヨ』トノ先生ノ御意志デアル。

春風秋雨三十年、爾來コノ事ガ自分ノ念頭ヲ去ラズ、往年大阪醫大在職中ニ早クモ原稿ノ一部ヲ執筆シテ見タガ、黄口マタ乳臭、吾ナガラ恥カシクナツテ、全部暗黒裡ヘ拋棄シテ了ツタ。

シカン自分トシテハ其後歳ト共ニ『學術の眞理ノ爲ニ廣ク學界ニ向ツテ言ヒタイ事柄』ガボツボツ殖エテ來タ。就中ソノ主ナルモノハ『イムベデン』現象及ビ『コクチゲン』ニ關スル事ト、平壓開胸術乃至平壓開胸ニ開腹術ニ關スル事トノ二ツデアル。此ノ年月自分ノ教室ノ門ニ入ツタ學徒ノ努力モ主トシテ此ノ二方面ヘ集中サレテ來タノデアル。今ヤ停年ガ目睫ノ間ニ迫ツテキル。心血ヲ濺イダ學術の努力ガ埋滅シテ傳ラザルガ如クンバ學者千秋ノ恨事デアル。特ニ自分ノ學術の努力ノ結果ガ一面ニ默殺サレツツ、他面ニ剽竊改竄サレルニ至ツテハ痛恨ハ更ニ深い。自分タラザル者デモ、此等殘賊ノ徒ヲ一掃シ、學術の努力ノ結實ヲ完全ニ保護スベキ建物ヲ欲シト思フデアロウ。此ノ外科學總論ハ言ハバ此ノ目的ニ向ツテ、伊藤(隼三)先生ノ遺サレタ「ブラーン」ニ準據シテ、前述ノ如キ基礎ノ上ニ建設サレターツノ新築デアルト考ヘテモヨカロウ。

教室ノ講師醫博荒木千里、胸底深ク潜ンデキル余ノ心事ヲ感得シタカドウカ、ソノ昔、藍關ニ雪ヲ蹴ツテ韓愈ヘ追ヒ縋ツタ孫湘ノ心ヲ持ツテカドウカ、此ノ新著ノ爲ニ挺身自カラ進ンデ附圖一切ヲ準備シタ。教室員モ亦タ或ハ構圖ニ或ハ原稿ノ筆寫ニ精勵シタ。我ヲ忘レテ此等ノ努力ガ無ツタナラバ、本書ハ多分未ダ出現シ得ナカツタデモアロウ。

儀部・伊藤(弘)兩教授ガ其ノ所有ニ係ハル臨牀材料ヲ本書附圖ノ爲メニ全部開放シテ呉レタコトヤ、時ノ陸軍省醫務局高木醫事課長、軍醫正村上德治博士、岡山縣長嶋生園長光田健輔博士ガ普通デハ得ラレヌ有用ナ附圖ノ寄與ヲ惜マナカツタコトモ感謝ノ至リデアル。

上述ノ如ク此ノ「外科學總論」ニハ猪子・伊藤兩恩師ヲ始メトシ、教室關係ノ多數ノ人々ノ精魂氣魄ガ打チ込マレテキル。本書ヲ繙ク者ガ一種ノ靈感ニ打タレ、紙面所在、或ハ縱橫叱咤ノ聲ヲ聞キ、或ハ切々懇々ノ説述ヲ深ク腦裏ニ印刻セラレ、或ハ肺肝ニ徹スル眞理ノ前ニ肅然トシテ襟ヲ正シ、或ハ眼底既ニ現幻ノ界ヲ超脱シテ『實體』ノ搖曳浮動ヲ目睹シ、神韻縹緲、紙背風發、頁マタ頁、自ラ翻ルノ慨アルヲ覺ユト謂ツテモ、自分ハソレヲバ決シテ不可思議トハ思ハナイ。

昭和九年七月四日

著 者

内 容 目 次

第一編 炎衝論 Entzündungen. 第二編 外科手術學 Allgemeine chirurgische Operationslehre (Akiurgie). 第三編 外科の損傷 Chirurgische Verletzungen. 第四編 組織損傷各論 Verletzungen der Gewebe. 第五編 創傷傳染病 Wundinfektionskrankheiten. 第六編 機械

的疾患. Mechanische Erkrankungen. 第七編 外科的腫瘍學 Chirurgische Onkologie. 第八編 外科的疼痛學 (Chirurgische Dolorologie. 第九編 各組織ノ外科的疾患. Chirurgische Erkrankungen einzelner Gewebe. (本文615頁, 挿圖599) 事項・人名索引 Register (38頁)

此ノ書物が出来上ルト、前以テ註文サレテキタノデ、發兌元ノ南江堂カラ製本済ミノモノ三部ダケ鳥潟教授ノ手許ニ届イタ。鳥潟教授ハ其日直チニ一部ヲ猪子先生ノ御宅ヘ持參シテ獻呈シ、他ノ一部ヲバ名古屋ノ伊藤肇博士(故伊藤隼三先生令嗣)ノ所ヘ發送シ、残りノ一部ヲ自宅ヘ持ち歸ラレテ、伊藤(隼三)先生ト祖先トノ靈前ニ供ヘタ。敢テ毫モ名山ヲ顧ミルコトヲサレナカッタ。

十月ノ初旬ニナリテ比較的大量ノ部數ガ再ビ鳥潟教授ノ手許ニ到達シタ。ソレデ此ノ著書ハ京大ノ凡テノ教授、外科・整形外科ノ教授・助教授・講師、日本ノ外科學者トシテ現ニ教壇ニ立ツテキル大學専門學校ノ教授諸氏、知名ノ外科學者、教室關係諸氏、特別ナ知人等ニ一々自署ノ上デ贈呈サレタ。マタ此ノ著述ニ關係ノアツタ教室員ニモ贈ラレタ。

此等ノ人々ノ大多數カラ書物ヲ受取ツタ挨拶ガ來タ。且ツ同時ニ感想ヲ寄セラレタ人も多數ニアツタ。以下「鳥潟外科學總論」ニ對スル諸家ノ感想ノ一般ヲ抄録スル。(次第不同)

○S 教授

『御苦心の程ありて其獨創的編述振りには敬服に堪へませぬ。實に學術書としては破天荒の快著と存じます』

○Y 教授

『長年の御勉學と御經驗によつての御著述とて、未だ詳しくは拜見仕らず候へども構成の妙御記述の簡明なる學生にも學徒にも無二の好伴侶と存じ敬服に堪へず候。小生も貴著御自序中にあるが如く數年前一度外科教科書の編述を企圖いたせしも中途にて「未だ其機に非ず」として放棄いたし候次第、恐らく小生も今後何年か後には貴下の如き心地にて同じ足跡を踏むにあらずやと考へ申し候』

○K 教授

『いつも乍ら日本醫學の爲 萬丈の光彩を添え且つ後進に範を垂れさせ 候事感銘の至りに御座候』

○SM 教授

『早速開卷劈頭の御序文一讀御高志の在る所を敬承感服仕候』

○H 教授

『直ちに序文と目次とのみを只今一讀致し候處に候へども、在來の外科總論とは完全に趣を異にし全く日本に於て作られたる外科學書の最初のものたる感を抱かせられ申し候。之こそは日本人によりて著はされし最初のものとして歐米に示して然るべきものと感じられ申し候』

○TD 博士

『猪子・伊藤兩教授の衣鉢を傳へ、更に自家獨創の貴重なる業績を織込み、京大の爲め萬丈の氣焰を揚げられたる點、只敬服の外無之候』

○O 博士

『卷頭既に大なる教訓を得感銘いたし居候』

○SS 博士

『先づ序文を拜讀致し候に、御元氣な御高話を親しく拜聽致す思致し大なる興味を覺え、次で本文を繙くにその内容の有益にして豊富なるは云はずもがな、何となく迫り來る氣魄、如何にも學兄が京大外科を脊負ふて嚴然と立ち上り勇敢に四方に向つて多年の蘊蓄を傾けて獅子吼し居るゝ御姿を目のあたり見るの心地して多大の愉快を覺え、併せて衷心よりの敬意を表するものに御座候』

○SM 博士

『待望せし通り決して月並の著書にあらざる事を 第一に愉快に感じ申し候。凡ての條項が少しの曖昧もなく適確に解釋され著述されたる事、如何許り外科學研究者は勿論學生諸君にとりても大なる力強さを與へたるか計り知れざる利益ありと愚考いたし候。猶外科的疼痛學の條下に至りては誠に痛快に感じ申し候。貴下の此の御著は外科書として近來無暗矢鱈に簇出する燒直し的の著書に對し一大痛棒を與へたるの感大なるものを驚嘆と共に云々』

○IH 博士

『御著書を御惠贈下さいまして本日難有拜受、歸宅後早速父の佛前に供へました。教室外に出て働いて居りますと、先生に御相談出來たらばと思ひます場合が始終で御座います。此度の御著書によりまして先生の御傍に居らして戴きますと同様に何時にても此上なき指針を得られる様になりましたことは誠に難有き事で御座います』

○HS 博士

『卷を繙けば分類に配列に既刊の外科總論とは 其趣を異にし殊に内容に於ては 從來の翻譯書と全然異り、吾々の知らねばならぬ事、全く知らずに見過せる事、多年疑問であつた事等が次ぎ次ぎに書かれ教へられ、驚き且つ喜びに不堪次第に候。附圖の獨特鮮明なる紙質の良き等感謝の外無之候。今後本書によりて啓發せられ教導せらるゝ事多々あるべく、不幸先生の講義に接する機會なかりし小生は今後本書によりて一學生として勉強せん事を期し居り候』

○SH 博士

『あの緒言の通り卷を措くの暇なしに長年——詳しく曰へば十六年の長きに亘つて待ちに待つとた戀人にでも廻り合ふやうにして讀んで仕舞ひました。これは實に煮沸沈澱元（一九一七年）と共に私が今迄讀んだ専門たると専門外たるとを問はず最も興味をもつて讀み且つ最も啓發せられた書籍であります。噫！先生よりも前に、そしてまた先生よりも後に、亦た誰か斯く

の如き書物を世に出し得るでありませう』

○FK 博士

『御高著を通讀し自分の學得の妙きことを感じ、一方そは一の外科總論でなく醫學治療通論と申すも決して過言にあらずと存じ候。就中内科醫にとりてもせめても炎衝論とか疼痛學とかは再三通讀する必要も有之べく、多分一度通讀せし者は必ず他書には稀に識るを得る所謂著者の御苦心親切を裏書することと存じ候。右の主旨により小生は既に通讀せし御高著は之を内科醫に順々に見せてやり又御送り下され候書は之を毎日机の上に置いて何回となく讀む考へに候。又醫學術語の解釋などは語學涵養の唯一の「ライツ」とも親しみとも相成るべしと存じ候』

○TS 博士

『早速卷頭より拜讀仕り候處言々句々御聲に接する慨有之、親しく御指導を仰ぎ居る心地致され喜びに不堪候』

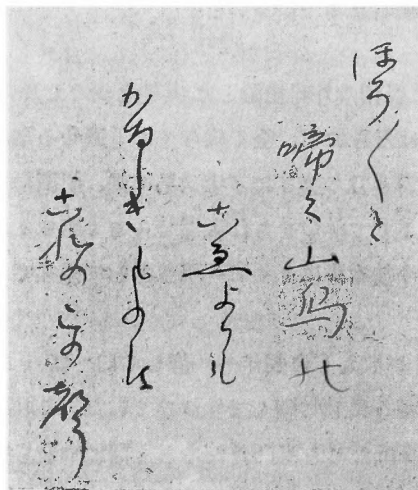
○YH 博士

『御序詞拜讀眞に襟を正し申し候』

○US 博士

『今回の御高著は多年御努力の結果とて内容非凡にて充實せる點類を見ざるは固よりに候が、それよりも全編を通じ崇高なる御人格の現れ躍如たるものあり唯に讀者をして其の懇切なる指導に感銘せしむるに足るの良書たるのみならず更に現代一部學者の心狀を痛罵餘すなきが如きは單に一編の外科學書たるに止らず正に時弊矯正に資する處多大なるを覺え痛快至極に存ぜられ候』

諸家ノ感想抄録ハート先づ此位ニシテ置クガ、此ノ書物ヲ所有シテキル教室員等ガ鳥潟教授ノ署名ヲ乞ウタ場合ニ教授ガ卷頭ニ書キ與ヘタ文句ノ二・三ヲ紹介ショウ。



『教室の指導精神 後世へのテストメン
ト 眞に之を解する者は夙夜之を讀みて
更にかの耿々たる星河を仰ぎ見よ これ
予の想を潜めし所なり』

『眞に師父たるものはその肉體に非ずし
てその氣魄なり
汝洵に其祖を念はゞ之に侍し之に仕ふる
事に在すが如くなるべし』

此書ハ實ニ鳥瀉教授ノ殆ンド一切デア。教授ノ肉體ヨリモ此ノ書物ノ方ガ更ニ一層尙バルベキデアロウ。教授ノ肖像ニ對スルヨリモ此ノ書物ヲ緋ク方ガ更ニ一層教授ヲ知ルコトニナルデアラウ。此ノ書物ヲ尊重シナイデ他ニ鳥瀉教授ヲ尊重スベキ方法ハ無イ。此ノ書物ノ完成ヲ祝サナイデ他ニ鳥瀉教授ニ祝スベキモノヲ求メル譯ニハユカヌ。教授ニ百歳ノ壽ヲ祝スルヨリモ此ノ著書ノ完成ノ方ガ更ニ一層祝サルベキデアラウ。最高學府タル所以ハソコデア。ル。

伊藤(隼三)教授ノ遺志ガ鳥瀉教授ニヨリテ此ノ「外科學總論」トシテ達成サレタト同様ニ、鳥瀉教授ノ學術の氣魄ハ百歳ノ後必ず何人カヲシテ此ノ「外科學總論」ニ不斷ノ新陳代謝ヲ行ハシメ、以テ京大外科ノ學燈ト共ニ永久ノ生命ヲ維持セシメルデアラウ。

附記 「鳥瀉外科學總論」ハ猪子・伊藤兩恩師ニ捧ゲラレタモノデ(本稿冒頭參照)、從ツテ其ノ印税ハ全部『猪子・伊藤兩教授記念會』ノ收入ヘル所デア。ル。

伯林 Langenbeck-Virchow-Haus ニ於テ1934年4月4日ヨリ7日迄開催セラレタル

第58回獨逸外科學會ノ演說抄錄

(Zbl. f. Chir. 1934, Nr. 23, S. 1368—1392, Nr. 24, S. 1403—1440)

講師 醫學博士 勝 呂 進 抄

開會時間ハ豫定通りニテ grösste Pünktlichkeit ヲ示セリ。

會長 (M. Kirschner-Heidelberg) 挨拶

獨乙外科學會ハ其ノ名聲ヲ全世界ニ誇ル光榮ノ楯(看板)ヲ高くカザシ、本會ノ目的ハ其ノ創立者ノ指針ニ從ツテ常ニ變ラザルヲ説キ、例年ノ如ク、1933年ノ數多キ本會員ノ死亡者、特ニ Oberst (Freiburg), v. Hacker (Graz), Poppert (Giessen), A. W. Meyer (Berlin), Tilmann (Köln) ニ對シ追悼ノ意ヲ表スル爲ニ全員ノ起立ヲ求ム。

次ニ多數ノ演題ヲ分類スルニ用ヒタル標準ヲ知ラシメ、傳染病、癌並ニ Luftschutz、及ビ遺傳學ノ問題ハ特殊ノ注意ヲ拂フ可キヲ述べ、外科學ハ今日再ビ分科ノ道ヲ辿ラントスルアラズ、眼ヲ全體ニ注ギテ枝葉ヲ顧ミルコトナク最後ノ大目的、即チ日常生活ノ眞ツ唯ガ中ニ立テル外科ニ向ツテ邁進ス可キヲ説キ、最後ニ獨乙外科學會ガ大戰以後國際外科學會ニ對シテ勝利ヲ得タルハ、正ニ本會員各位ノ毅然タル男性的の民族の一致團結ニヨルモノトナシ、今後益々獨乙外科學會ノ全世界ニ對スル其ノ指導地位維持ノ爲ニ全會員ノ重大ナル任務ト覺悟トニ就キ切言ス。

抄者曰ク、會長ハ毎年傳統的ニ「獨逸外科ノ全世界ニ於ケル指導の地位ノ確保」ヲ高唱ス。旺ナリト謂ツベシ。

1) Lampe (Tiegenhof-Danzig): Joh. Friedlich Dieffenbach ノ追憶。——獨乙ノ偉大ナル外科醫Dノ効績 (650ノ箚頌「ヘルニア」中110ヲ全治セシメ、3ケ年ニ400回ノ皮下斷腱術ヲ行ヒ、

200回ノ印度式造鼻術, 32回ノ Oberkieferrresektion 中1例ノミ死亡等)ヲ稱へ、故人ヲ尊敬スルト同時ニ自ラ反省ス可ヲ述ベタリ。

抄者曰ク、日本ニテハ先輩ノ効績ヲ賞揚セル演說ナドハ今迄皆無ナリキ。今後モ亦然ランカ。

2) **Olivecrona (Stockholm):** 聽神經腫瘍ノ根治手術々式ト成績。——聽神經腫瘍手術ノ今日マデノ發達ヲ3期ニ分チ、第I期ニハ後頭窩ヲ開キテ腫瘍ノ根治的剔出ヲ行ヒタルモ死亡率80%ナリキ。第II期ハ Cushing ノ非根治剔出法ガ用ヒラレタルモ、機能ノ恢復思ハシカラズ、再發モ亦多キ爲、此ノ方法モヨロシカラズ。第III期ハ即チO自身ノ方法ナリ。次ノ如ク行フ。

麻醉ハ原則トシテ Avertin ヲ使用シ、後頭窩ハ一側ダケ開放ス。穿顱術ヲ施シタル後腫瘍ノ位置ヲ容易ニ知ル爲ニ第IV腦室ヲ穿刺シ、腫瘍ノ一部ヲ被膜ヨリ搔取り置キ、以テ視野ヲ擴大剥離ノ際腫瘍ニヨリテ手術ノ邪魔サレヌ様ニス。被膜剥離ハ先ヅ下端ヨリ初メ、Nn. facialis, glossopharyngeus 及ビ Vagus ニ注意ス。椎骨動脈ノ大ナル分枝ハ結紮ス。聽道マデ剥離シタル後上端ヲ岩狀骨ニ沿ヒテ剥離シテ聽道ニ密接シテ切除ス。此ノ際聽道自身ヲモ搔抓シ Verkoehen ス。止血ハ嚴ニス。24時間 Drain ヲ入レテ置ク。31例ノ死亡率ハ19.14%ナリ。手術ガ新シキ故遠隔成績ハ猶不明ナリ。

3) **Wanke (Kiel):** 小腦腫瘍ノ解剖ト外科。——小腦腫瘍ノ80%ハ小兒期ニ現ル。5—10歳ノ間ガ特ニ多シ。之ニ反シ大腦腫瘍ハ40—50歳ガ最も多シ。腫瘍ノ病理解剖ヲ知ル事ハ根治手術ガ可能ナルヤ、或ハ姑息的療法ヲ行フ可キカヲ決定スルニ必要ナリ。惡性 Medulloblastom ノ場合ニハ姑息的療法ヲ行ヒ後ニX線照射ヲ施ス。Ependymom 或ハ Ependymoblastom ハ良性ノモノナレドモ、之ハ多ク菱形窩ヨリ發生シ、延髄ヲ傷ケル恐アル故ニ此ノ場合モ姑息的療法ニヨラネバナラス。Medulloblastom ト Ependymom トノ頻度ハ50%ナルガ故ニ小腦腫瘍ノ約半數ハ姑息的療法ヲ施スニ過ギズ。而シテ之等腫瘍ノ診斷ハ肉眼的ニ容易ナル故手術中ニ診斷スル事ガ必要ナリ。

4) **Tönnis (Würzburg):** 腦ノ血管畸型ト腫瘍トノ診斷及ビ療法。——腦ノ血管畸型ハ頭蓋腔内腫瘍ノ一小部分ヲナスモノシテ病理解剖學上次ノ如ク分類セラル。a) 靜脈性(囊様、叢狀、海綿狀蔓狀血管腫) b) 動脈性及ビ c) 動靜脈性。之等ノモノヲ他ノ腦腫瘍ト鑑別スル事ハ頗ル至難ニシテ、手術前ノ診斷ハ殆ンド不可能ナリシモ Löhrl ノ動脈攝影法發見ニヨリ、今日デハ可能トナリ、有效ナル療法ヲ得ルニ至レリ。囊狀血管腫ノ場合ニハ囊壁ヲ殘シテ腫瘍ヲ剔出シ、動脈性又ハ動靜脈瘤ニアリテハ流注血管又ハ内頸動脈ヲ結紮ス。

5) **Jentzer (Genf):** 腦腫瘍ト誤ラレ易キ小血腫ヲ伴フ外傷性及ビ非外傷性硬腦膜肥厚。——頭蓋骨ノ外傷ヲ受ケタル後數年ニシテ腦腫瘍症狀ヲ呈シタル2例(1例ハ大腦、他ハ小腦腫瘍ノ症狀)ヲ報告ス。穿顱シタルニ腫瘍ハ無ク、硬腦膜ノ肥厚ヲ見タリ。鏡檢スルニ小ナル血腫ナリキ。即チ外傷ニヨツテ起ツタ多數ノ小血腫ヲ伴ヘル硬腦膜炎ナリキ。鑑定上注意スベキヲ述ベタリ。

6) **Peiper (Frankfurt a. M.)**: 脳室撮影ノ一新法。——今日マデノ方法ハ針ノ固定ガ十分ナラズ、又腦脊髄液ト空氣トノ交換ガ不十分ナリキ。P ハ腦室ニ針ヲ穿シタル儘、腰椎穿刺ヲ行ヒ、ココヨリ液ヲ徐々ニ滴下セシメテ自然ニ腦室ニ空氣ヲ入ラシム。大脳腫瘍ニハ推奨スレド、第III腦室腫瘍ニハ推奨セズ。

7) **Schneider (Breslau)**: 腦ノ血行調節ニ就テ。——Rein ノ熱流計ヲ用ヒテ血管ヲ開カズ生理状態ニテ犬ノ内頸動脈ヲ計リ、正常時ノ腦血行ト其ノ血液調節ノ工合ヲ檢シ、四ツノ臨床上重要ナル所見ヲ得タリ。

i) 正常ノ状態ニテハ血液ノ絶對量ハ一定ニシテ、人間ノ腦ニ換算スレバ1分時約ク 1L. トナル。

ii) 腦交感神經ノ切斷又ハ刺激試驗ニテ、交感神經ハ腦血管ノ緊張ヲ司ルヲ知ル。各側ノ交感神經ハ、相互ニ腦ノ兩半球ヲ同時ニ司配ス。故ニ一方ノ交感神經ガ脱落スルモ他方ガ代償ス。

(抄者曰ク、肺デモ亦タ然ルナランカ)。

iii) 内頸動脈ノミヲ結紮スレバ他側ノ内頸動脈ニハ6—10% ノ血流増加ヲ來スノミナルモ、總頸動脈ヲ abklemmen スル場合ニハ他側ノ内頸動脈ニ70—100% ノ増加ヲ來ス。此ノ事實ハ個々ノ總頸動脈ノ枝ヲ結紮スル場合ニ示サル、如ク、中硬腦膜動脈ノ血行停止ノ反射作用ヲ物語ルモノナリ。此ノ Dilatationsreflex ニヨリテ一側總頸動脈ヲ結紮シテモ腦ノ血行ハ一定ニ保タル。

iv) 藥物學的ニ Adrenalin 及ビ CO₂ ハ腦血管ヲ擴張セシム。

追加: **Sunder-Plasmann (Münster)**: ——腦ノ血行調節ニハ Carotissinus ガ最も重要ナリ。此處ニハ無數ノ神經ガ來リ互ニ交錯シテ居ルヲ見ル。

8) **Jorns (Jena)**: 腦壓迫ニ高張液ノ應用。——腦腫張及ビ壓迫、殊ニ腦手術後ノ夫レニ高張食鹽水ノ靜注ヲ極力推奨シ、之ノミニテ腦水腫ハ根本的ニ防止シ得トナス。食鹽水ニ6—7% ノ割合ニアラビアゴム溶液ヲ加フレバ更ニ效果ハ大ナレドモ人體ニハ危險ナル故用ヒラズ。

追加: **Bernhard (Giessen)**: ——高張食鹽水ノ方ガ葡萄糖溶液ヨリモ有效ナリ。而シ後者ハ肝臓領域ニ重大ナル手術の侵襲ヲ加フル場合ニ賞用セラル。

9) **Bauer (Breslau)**: 遺傳病子孫豫防法令ノ外科的意義。——國民ノ健康増進上遺傳素質ノ改良ニ關スル1933年7月14日制定ノ法律ニヨレバ、次ノ疾患ガ舉ゲラル。

a) 先天性低能兒 b) 早發性癡呆 c) 躁鬱病 d) 遺傳性癲癇 e) 遺傳性舞蹈病 (Huntington 氏ノ Chorea) f) 遺傳性盲目 g) 遺傳性聾 h) 重症遺傳性畸型ニシテ、斯ノ如キ患者及ビ重症酒精中毒患者ニ對シテ外科醫ハ法律的ニ報告及ビ去勢手術ヲ施ス可キ義務ト責任ヲ行スル事ヲ詳細報告ス。

10) **Gebhardt (Hohenlychen)**: 現状ヨリモ能力障礙。——成長期ニアル若人ノ1/3ハ遺傳的ニハ健全ナレドモ、一過性ニ能力障礙ノ起ルモノアル故ニ、カカル1/3ニ對シ欠陥ヲ補ヒ、健全

ナル國民ノ一員タラシムル爲ニ全力ヲ盡ス必要アリ。之ト同様ノコトガ外傷患者ニ云ヒ得ラル。即チ外傷ヲ受ケタル當時ニハ、大シテ障礙ノ無カリシモノガ、後ニ能力障礙ノ爲ニ癱瘓トナル事アルガ故ニ、外科醫ハ外傷患者ヲ取扱フ場合ニ、外傷輕重ノ現狀ニノミトラワレズ、後遺症(能力障礙)ヲモヨク考察スベシ。

11) **Poehlmann (Waiblinger):** Kirschner 氏脊髓麻醉法ノ經驗。——120例ニ行ヒタル成績ハ20%ニ於テ極メテ良好、75%ニ良好、5%ニ於テ不完全ナリキ。麻醉ニ要セル時間ハ臍ノ高サマデ20分、乳房ノ高サマデ30分ナリキ。然シテ何等ノ危險モナク、血壓ノ急降下ハ Ephetonin ニヨリテ忽チ除カレタリ。30%ニ於テ嘔吐ヲ來シタリ。時ニ左肩胛部ニ放散スル疼痛アリキ。排尿困難モアリタリ。本法ノ利點ハ特ニ確實ナル事ト患者ノ負擔少キ事ナリ。

追加：**Kirschner (Tübingen):** ——患者ヲ安心セシムル爲ニ極メテ少量ノ「スコボラミン」ヲ靜注スルガヨシ。

12) **Kingreen (Greifswald):** 大手術前ノ血液殘留窒素測定。——血液殘留窒素量ニヨリテ或ル程度マデ病氣ノ經過ヲ判斷スル事ガ可能ナリ。又其ハ患者ニ大手術ヲ施シ得ルカ否カヲ定ムル標準トモナリ、殊ニ麻醉法ノ選擇ニ役立ツ。即チ殘留窒素ノ多キ場合ニハ局所又ハ腰椎麻醉ガヨク、Avertin ノ使用ハヨロシカラズ。將來ハ此ノ殘留窒素測定ニヨリテ適當ノ手術方法ヲ選ミ、以テ患者ヲ危險ニ陷ラシムルガ如キ事ナキニ至ルベシ。

追加：**Bernhard (Giessen):** ——實驗ニヨリ同様ノ結果ヲ得又同様ノ結論ニ到達ス。殘餘窒素ノ定量ハ手術カ、非手術カガ問題トナル脾臟壞死ノ場合特ニ重要ナリ。

抄者曰。Pankreasnekrose ニ向ツテハ一切早期ニ手術スベシ。此ノ如キ患者ヲ待タセ置キテ Reststickstoff ナドヲ測定シ手術スベキヤ否ヤヲ決定スルナドハ隨分吞氣ナコトナリ。

13) **v. Brandis (Freiburg i. Br.):** 體溫調節ト麻醉。——動物ニ Avertin 麻醉ヲ施シテ行ヒタル實驗ニヨリテ、體溫ノ維持ハ血行ニ關係スル事ヲ知レリ。麻醉ニ於ケル組織溫度ノ下降ハ全身平等ニ起ルモノニアラズシテ、冷却ハ腹腔手術ニ於テ最も早く現レ、腎手術ニ於テハ著シカラズ。常態ニ復歸スルニハ6—8時間ヲ要ス。

14) **Fuss (Bonn):** 手術ノ含水炭素新陳代謝ニ及ボス影響。——手術ノ際含水炭素新陳代謝ノ消長ガ見ラレルガ、之ハ麻醉ノ影響ノミナラズ、手術操作其ノモノガ作用スルガ爲ニシテ、手術ノ種類及ビ時間ニヨリテモ差アリ。腹腔内手術ノ場合ニハ他ノ部ノ夫ト異ル所ヲ見ル。肝臟及ビ其ノ附近ノ臟器ニテ仕事ヲスル時ニ含水炭素新陳代謝ハ特ニ障礙セラル。血糖量ノ變化ト並行シテ血液乳酸量モ亦タ變化ス。

15) **Süssi (Görs):** 手術後肺臟合併症療法ニ於ケル頭部低下ノ意義。——38例ニ於テ手術後數日間頭部ヲ約30度低下シテ臥床セシメ重症ノ肺臟合併症ニ好結果 (glänzende Erfolge) ヲ得タリ。手術後カカル位置ヲトラシムル事ハ呼吸及ビ心臓機能ニ好影響ヲ及ボスモノナリ。故ニ肺合併症ノ豫防トモナラン。

16) **König (Reipzig)**: Sympatol 及ビ炭酸瓦斯ニヨル血栓形成及ビ栓塞ノ豫防。——7日間3回ヅツ20滴ノ Sympatol ト炭酸瓦斯トヲ與ヘテ血行ト呼吸トヲ旺ニシ、血栓形成及ビ栓塞ヲ4,000ノ臨床例ニテ以前ノ1/3ニ低下セシムル事ヲ得タリ。

追加: 1) **Geisendorfer (Breslan)**: ——手術後栓塞ノ原因トシテ數ヘラル、モノ多キモ信ズルニ足ルモノナシ。彼ハ栓塞ノ原因ハ患者ノ高齢ニアリトナシ、斯ノ如キ患者ノ手術ニ際シテハ、術前ニ適當ノ準備ヲナシ手術可能ノ状態トナシ置クベシト。

2) **Klapp (Marburg)**: ——術後 Embolie ノ豫防ニハ體操ト術後ノ良好ナル臥位ガ大切ナリ。

17) **Puhl (Kiel)**: 胃ニテタニエノ問題ニ就テ。——胃癌狹窄ノ爲ニ起リシ嘔吐ニ引キ續キ、鹽類及ビ蛋白質新陳代謝ノ障礙ヲ確メ得タリ。而シテ此ノ新陳代謝障礙ガアルカリ性又ハ過酸性ニ傾クニ從ツテタニエ又ハ尿毒症ノ状態ガ發現セリ。ヨツテ胃擴張ニ伴フタニエハ斯ノ如キ新陳代謝障礙ノ局所症狀ナラン。

18) **Gissel (Rostock)**: A.T. 10. ヲ以テスル血友病ノ療法ニ就テ。——A.T. 10.ハ血液ノカルチウム量ヲ増加セシムル故血友病患者ニ使用(5ccm A.T. 10. ヲ3日間與フ)シテ4例ニ於テ好結果ヲ得タリ。

映寫示説

1) **Tönnis (Würzburg)**: 頭蓋内腫瘍ノ診斷及ビ治療ニ對スル提示。——腦腫瘍ノ診斷又ハ手術適應ニ對スル診斷の手術ノ價值ヲ示ス。

2) **Stegmann (Dortmund)**: 肺臓外科ニ對スル示説。——石灰化セル乳腺腫瘍ヲ肺腫瘍ト誤レル例、或ハ横隔膜ヘルニアト診斷スルニ困難ナリシ例等2, 3診斷上興味アル症例ヲ示説ス。

3) **Hortung (Eisleben)**: 横隔膜下膿瘍ノ場合ノ横隔膜異常高位。——腎結核ヨリ發生セル横隔膜下膿瘍ニヨリテ横隔膜ガ非常ニ上方ニ押し上ゲラレ膿胸ヲ思ハシメタル例。

(抄者曰ク、横隔膜下ノ膿カ否カハ Punktion ノ際 Stempel ガ横隔膜ト共ニ上下ニ運動スルヤ否ヤヲ靜觀スレバ容易ニ鑑別シ得ル筈ナリ。近時、人、此ノ舊ク知ラレタル診斷方法ヲ閉却スルガ如シ)。

4) **Vogeler (Berlin)**: 髌臼突出。——外傷ニヨラス關節炎ノ結果トシテ生ジタル例ノX線像。

5) **Vogeler (Berlin)**: X線像ニ於ケル頭蓋骨ノアミロイド症。——頭蓋骨ガ多數ノ腫瘍ニヨリテ埋メラレタル例。即チ之ハ元來網狀織内皮細胞腫ナリシモノガアミロイド變性ヲ起シタルモノナリ。

6) **Zahradnicek (Prag)**: 高位先天性股關節脱臼ノ整復術追加。——大腿骨大轉子ノ下ニテ骨片ヲ切除シテ目的ヲ達ス。

7) **Oelecker (Hamburg)**: 骨微毒及ビ脊髓癆性關節炎ノ領域ヨリ。——今日尚ホ誤診サレ易キ骨微毒ノX線寫眞供覽。

8) **Löhr (Magdeburg)**: 新鮮ナル外傷、火傷、蜂窩織炎等ニ對スル肝油軟膏療法 (Lebertransalbenbehandlung)。——肝油ヲ軟膏狀トナシテ上記ノ場合ニ直接創面又ハ創内ヘ貼用ス。此際_Lギブス_T繃帶ヲ併用スルモ可。軟膏ノ硬度ハ體温ニテ ölige Masse トシテ熔解シ組織ニ浸入 (imbibieren) シ得ル様ニス。肝油ノ作用ハ下ノ如シ。第一。壊死組織ハ速カニ zerfallen シ強キ化膿トナリテ離脱ス。第二。組織ノ再生ヲ促進ス。結締織細胞モ Epithel 細胞モ何レモ良ク新生シ、創面ハ清淨トナリ、皮膚缺損大ニテモ皮膚移植ナドヲ必要トセズ位ナリ。第三。肝油ソレ自身ハ無菌性ナリ。且ツ創面ニ繁殖スル普通ノ膿菌ニ向ツテ殺菌性ニ作用ス。映寫ニヨリテ事實ヲ認メシム。

(抄者曰ク、肝油ノ作用トシテ掲ゲラレタルモノハ凡テ肝油ニヨリテ惹起セラレタル局所性白血球過多ニ歸スベキガ如シ。一應追試ノ價値アルベシ)。

9) **Klages (Halle)**: 骨髓炎ノ療法。——Löhr ノ法ニヨリ肝油_Lギブス_T療法ヲ40例ニ就テ試ミタリ。但シ_Lギブス_Tハ切開部ニ空隙ヲ作り排膿ヲ容易ナラシメタリ。成績ハ良好。細菌検査ニヨリテ肝油ノ滅菌力 (Bakterienfreiheit u. bakterizide Wirkung des Lebertrans) ヲ確メタリ。

10) **Havlicek (Schatzlar, Tschechoslowakei)**: 血栓形成ト其ノ豫防ノ解剖學的及ビ生理學的基礎。——螢光物質ヲ注射シテ血管ヲ示現スル法ヲ述べ、之ニヨリテ血栓形成ノ問題ヲ解決セントノ希望ヲ述べ。

11) **Gerlach (Rostock)**: 紫外線照射下ニ於ケル組織鏡檢。——人間及ビ動物ノ組織ハ紫外線ヲ當テレバ微弱ノ螢光ヲ發ス。此ノ螢光ハ豫メ Rivanol, Uranin 等ニテ處置シテ置ケバー層強度ニ現ル。此ノ際密ナル組織ハ粗ナル組織ヨリモ螢光ヲ發スル事大ナリ。

12) **Kelling (Dresden)**: Heidenhain 氏腫瘍移植ノ補遺的實驗。——_Lマウス_Tニ鶏胎兒_Lモルモット_T及ビ白鼠ノ胎兒ノ卵巣及ビ胎盤ヲ注射シタルニ、胎盤ノ場合ハ大多數ニ、卵巣ノ場合ハ約半数ニ、鶏胎兒ノ場合ニハ僅カニ『出血性腫瘍』ノ發生ヲ見タ。此ノ場合胎盤及ビ卵巣ハ他ノ血管ニ對シテ自家ノ_Lホルモン_T性質ヲ維持シテ居ル。_Lマウス_Tニ其ノ胎兒ト前記材料トノ混合物ヲ注射スル時、又ハ上記ノ材料ヲ成熟_Lマウス_Tノ睪丸、卵巣ニ注射スル時ニハ異所的腫瘍ノ發生ヲ見タ。最後ニ前記ノ材料ヲ親_Lマウス_Tニ注射シテ、其ノ胎兒ヲ移植セル—Brebner—ヨレバ惡性腫瘍ガ發生セリ。産卵期ノ牝鶏ニ合鴨ノ胎兒ヲ注射シテ、其ノ卵ヲ移植スル場合ニハ卵中ニ異種細胞片ガ移行シテ居ル事ヲ尤モ明瞭ニ證明スル事ヲ得。此ノ細胞片ニハ Gene ノ作用ガアリ、腫瘍細胞ハ恐ラク一種ノ雜種ナラン。此ノ事實ハ又畸型ト先天的腫瘍トノ關係ヲ説明スルニ役立タン。(以下次號)

9 月例会

京都外科集談會

9月20日午後6時30分ヨリ京大樂友會館ニ於テ開會、次記臨床例及ビ_L心臟疾患ノ豫後_Tト題ス

ル眞下教授ノ特別講演アリタリ。

臨 床 例

Lipoma albobrescens ノ1例

膿胸ノ1異例

耳鼻咽頭性斜頸

噴門癌手術々式ニ就テ

膽囊結石カ、膽囊痛カ

後頭蓋窩囊腫性漿液性腦膜炎ノ1例

附 潛浸熱ノ本態ニ對スル考察補遺

安 江 高 助

弘 重 充

西 村 鍵 治

佐 々 木 義 孝

五 郎 川 正 己

荒 木 講 師

特 別 講 演

心臟疾患ノ豫後

眞 下 教 授

10月例会

京大樂友會館ニテ20日午後7時ヨリ開會、次記ノ臨床例及ビ「組織培養法ト其ノ應用」ト題スル木村教授ノ特別講演アリタリ。

臨 床 例

骨縫合2例

高度ノ腸膨滿ヲ伴ヘル腸閉塞症ニ對スル治療方針

外傷性十二指腸皮下破裂例

(大阪醫專)

打撲ニ因ル鼠蹊脫腸囊内腸管破裂ノ1例ニ就テ (名古屋市民病院)

廻育部假性粘液囊腫ノ1例

横 山 正 夫

稻 本 晃

小 野 榮 之

竹 内 次 郎

有 本 勤

特 別 講 演

組織培養法ト其ノ應用

木 村 教 授

伊藤教授歡迎宴並ニ京大外科懇親會

天高ク馬肥エタルノ好季節、恒例ノ京大外科懇親會ヲ兼ネ伊藤教授歡迎ノ宴ヲ10月28日午後5時半ヨリ祇園鳥居内ノ中村樓ニ於テ開催。猪子名譽教授ヲ初トシ主賓伊藤教授、發起人鳥潟磯部兩教授、ソノ他遠近各地方カラノ出席者モ合セテ總數101名ニ達シタ。鳥潟教授ノ挨拶ニ次デ伊藤教授ハ諸外國ノ新シキ印象談ヲ面白ク述ベラレタ。酒池肉林ニ興趣大イニ揚リ晴朗ノ良夜ニ主客歡談ヲ交ヘ、近年ニ無キ盛宴ニテ午後10時過ギ名殘ヲ惜ミツ、散會シタ。

藤浪名譽教授告別式

帝國學士院會員本學名譽教授醫學博士藤浪鑑先生ハ豫ネテ腎臓炎ニテ御靜養中ノ所、終ニ尿

毒症併發，11月18日午前1時50分神樂岡ノ自邸ニテ逝去セラレタ。告別式ハ20日午後2時ヨリ本學病理學教室ニ於テ門人葬トシテ盛大ニ執行セラレタ。同先生ト關係淺カラザル我が京大外科・整形外科兩教室ニ於テハ告別式ニ際シ花環一對ヲ靈前ニ供ヘ敬吊ノ誠ヲ捧ゲタ。

教室員並ニ關係者多數一堂ニ相會シタル京都外科集談會11月例會席上ニ於テモ亦タ一同起立默禱ノ禮ヲ捧ゲ，心ヨリノ哀悼ノ意ヲ表シタ。

會員動靜

入 會

南洋廳パラオ醫院

栃木縣宇都宮市外

京城セブランス病院外科教室

東京市麴町區富士見町2ノ3東京警察病院外科

東京市澁谷區宮代町一番地日本赤十字社病院二區

諸 井 孝
宇都宮衛戍病院
經 理 室
劉 彼 得
齋 藤 良 後
大 島 外 科 醫 院

轉 居

神戸市中山手通7丁目549

埼玉縣比正郡唐子村

京城醫學專門學校

大阪市旭區今福町307

福岡市馬出三角713

別府市松原通東町1丁目丸山旅館内

京都市左京區下鴨北園町40

滿洲派遣第十六師團司令部軍醫部

岡山市明田屋敷178

福岡縣福島町京町外科久壽病院

京大病理學教室

京大微生物學教室

福井市赤十字病院外科

岐阜縣高山町

敦賀町津内第179號

西 山 逸 平
岩 田 清 臣
佐 藤 剛 藏
黑 田 倭 民
濱 田 辰 敏
龜 山 致
岩 島 武 次
山 本 明 治
三 宅 幹 夫
米 村 精 一
深 井 親 信
村 上 治 朗
緒 方 經 美
中 尾 三 譽 治
林 文